

ラテンアメリカ

随想

観光立国ペルーの曲がり角

津村 光之

私はペルーに来て41年、会社は1984年に始めたのでちょうど35年である。ほとんど日本人など来なかった時代である。それに比べると今は隔世の感がある。そこで今回上記のテーマで私が今まで感じてきたこと、思っていることをこの場をお借りして記してみたいと思う。

私は日本人なのでどうしてもその目線で見えてしまうが、子供の時からラテンアメリカというイメージが強く、観光に行くなどは考えもしなかったことである。ただ覚えているのは、1960年代確か私が小学校の2、3年生の時、公務員をしている父が親戚に会いにペルーに行くといったとき母は大反対したものだ。結局父は強引にペルーに向かったが、母は私たち兄弟にこれが最後の別れになると言ったのを覚えている。

そういう記憶があるほど自分や当時の日本人にはそこに行くとはほとんどの人が考えなかっただろう。そこにいろいろな経緯を経て、結局旅行業に携わることになる。

日本の3倍以上の土地に時間のゆっくりした流れ、人生を精一杯楽しむ。当時の仕事がすべての日本人には考えられないような社会であったが、価値観の違いであろう。家族や、親戚を大事にして、みなで助け合う。当時の日本の競争社会とは全く対角線上の生活様

式である。

これからペルーに観光に来られる方もいると思うが、ガイドブックやWebのみの情報で動かず、こういう生活もまたあると角度を変えて見てもらいたいと思う。つまり、観光とは自分の日常や培ってきた価値観を見直し、よいところは取り入れ悪いところは反省するために最も適した行動と考える。

手前みそになるが、欧州、米国などは概ね基本的に日本と変わらない。広大な大陸に50近い国のある南米大陸、しかしブラジルを除きすべて言語はスペイン語。宗教はカトリックである。アジアや欧州では考えられない。その南米のゲートウェイで最も観光資源のあるのがペルーである。その変遷を探ってみよう。

観光はペルーにおいて鉱業、農業に続く第3の産業である。私が旅行業を始めたころは、まだまだブラジル、アルゼンチンが観光の

中心でマチュピチュ訪問者も多くなく、治安の問題もあり伸び悩んでいた。

ただ1990年代後半から、インターネットの出現とLCC（格安航空会社）が台頭して、旅行業界は利益がどんどん減少していき、何とかパッケージツアーを適正価格で販売ができる魅力のあるマーケットを探し始めた。そこで世界中の旅行業界が注目したのが、マチュピチュを擁するペルーである。欧米やアジアから遠いが、多くの遺跡と北半球と全く違った文化を持ち人々を魅了できるが、一方なかなか言葉の問題などあり、個人やネットだけでは心もとない。しかし、世界の観光業界が注目し2000年以降、ペルー観光は上昇の一途をたどり、世界に名だたる観光国となっていったのは皆さんもご存知のとおりである。

それにともない近代的なホテル



高級ホテルが立ち並ぶリマの海岸通り（写真はすべてMICKEY TOUR社提供）

も多く出現し、今はホテルの建設ラッシュで、世界的な大手チェーンホテルはほとんどペルーに進出してきている。ウェスティン、マリオット、ヒルトン、ハイヤット等々。また、ルイヴィトンまでが、世界で初めてペルーでホテル業に進出してきた。それとともに、日本からも2000年以降、どんどん観光客も増えて増加の一途をたどった。クスコのホテルの4星以上の宿泊客の30%が日本人といわれた時代である。

ところが最近ちょっと様子が変わってきている。ペルー政府観光局の統計のごとく、日本からの観光客は最近下降気味である。日本人が最近外に出なくなったと聞いて久しい。その一環でもあろう。

私も所用で年に1、2回日本に行くが、相変わらず便利で、安全である。ただ何かすべてが、順調に進みありがたいが、何かインパクトが不足しているような気がしてならない。一度全く違う環境に自分を置いてみるのもよいと思う。

ペルーは日系人も多く親日的な

国である。マニュアル通りではなく、本当にありがとう(Gracias!)と心の底から言ってくれる国である。是非これを体験してほしい。皆笑顔が美しい。電車の中でスマートフォンを見たり居眠りするより、緩やかな時間の流れの中に身を置いて、ペルーは人生楽しめる場所である。是非他のアジア諸国から増えた訪日観光客のように、見知らぬ国をもっと見たいという気持ちになってほしい。

ペルーへは、この統計には出ていないが、中国以外にアジア諸国は増加している。また、近隣諸国も増加していたが、最近チリやボリビア、アルゼンチン、コロンビアなどが、政治情勢が不安定のため今後は減少していくと予想されている。ただ、それでも南米における観光国のトップの座は揺るがない、今のところではあるが。観光業界もグローバル化の波は止められず、世界各国が観光誘致を促進しているため、ペルーも安閑としてはいられない。最近伸び率は鈍化していることは業界の中でし

ばしば話題になっている。

各国との競争が激化してきたのに加え、ペルーではホテルや航空会社などは整備されてきたものの、ソフト面でまだまだ劣ると私は考える。また、リマの空港の拡張が遅れており、新規航空会社がなかなか入れない。チリ、ブラジルに完全に後れを取っている。サテライトなどが足りず、航空機の乗り降りにバスが利用されることも多く時間を要して、結構イライラする。そのため飛行機の遅れなどが目立ち、観光客にとっては時間が気になり心配になることも少なくない。

アマゾンのジャングル、ナスカの地上絵、新たな北部チャチャボヤスのクエラップ遺跡など、魅力十分なのだが、やはり人々の多くはマチュピチュを目指して来る。そのため飛行機が遅れるとマチュピチュ行きの汽車の時間に間に合わなくなるなど、変更が生じたりして大変である。そのマチュピ

	2014	2015	2016	2017	2018	Acumulado Enero- Septiembre 2019	Acumulado Enero- Septiembre 2018	Variación % 2019/2018
Chile	903 793	984 584	1 055 880	1 101 055	1 159 188	932 064	870 538	7,1%
EE UU.	514 227	545 212	586 479	598 685	641 280	502 408	484 024	3,8%
Venezuela	48 411	42 111	59 192	196 495	367 739	88 301	268 180	- 67,1%
Ecuador	223 995	256 127	318 172	288 987	293 231	254 354	217 382	17%
Argentina	155 931	170 960	175 488	205 465	216 041	158 239	167 963	- 5,8%
Colombia	151 876	165 384	189 754	200 812	219 452	164 762	157 333	4,7%
Bolivia	126 689	128 943	136 805	146 660	158 974	141 453	112 907	25,3%
Brasil	147 875	148 312	148 296	173 753	177 711	133 395	134 863	- 1,1%
España	131 174	138 902	144 927	147 214	147 830	117 391	109 466	7,2%
México	67 016	76 368	87 443	93 763	103 620	92 533	74 309	24,5%
Francia	82 260	88 921	92 316	96 283	100 951	84 067	76 824	9,4%
Canadá	68 194	70 560	71 833	77 563	86 634	70 829	63 907	10,8%
Alemania	68 703	74 489	74 208	78 199	81 684	65 318	61 395	6,4%
Reino Unido	61 234	63 213	69 302	69 506	74 124	55 798	58 858	- 5,2%
Italia	55 109	60 385	66 697	73 955	73 653	56 692	56 767	- 0,1%
Japón	59 853	55 311	47 090	48 171	47 605	31 669	35 941	- 11,9%
Australia	41 842	41 568	42 870	41 810	39 565	30 261	28 627	5,7%
China (R.P.)	16 607	19 243	25 648	31 408	37 740	30 153	27 551	9,4%
Países Bajos (Holanda)	26 765	28 606	33 582	34 979	35 629	27 952	26 899	3,9%

ペルーへの主要国別観光客数 (出所: PROMPERU (ペルー政府観光局))



世界一高地にある大湖 チチカカ湖での葦舟に乗っての浮き島巡り



いまマチュピチュに次ぐ観光スポットとなるペルー北部チャチャボヤスのクエラップ遺跡

チュが雨季（12月から3月）になると土砂崩れが起り、鉄道が運休することもしばしばある。これは2000年以降あまり改善されていない。多くの観光客がマチュピチュに行けず残念な思いをして帰っていくと、悪影響が出るのは必須である。以前より政府観光局にこの件については警笛を鳴らしてきたが、いまだ改善はされていない。今後、観光立国として他国との競争に勝つためにはこれらの改善は急務である。

そこで私案であるが、クスコからマチュピチュは約120km、そこを電車で行く。現在80kmまで道路が整備されている。あと残り40kmの道路を整備すれば、バス・車ですべて行けるようになる。鉄道会社との契約などもあり難しい問題もあるが、技術的には難しくない。そして日本のハイブリッドのバスで往復出来るようにすれば、より早く、安く、確実にマチュピチュを見に行けるようになる。この案も何度か観光局に出してい



ペルーの代表的な観光スポット マチュピチュ



マチュピチュへの唯一の交通機関の鉄道

る。日本の最高技術の車を、世界中の観光客に知ってもらうチャンスでもある。そうすることで日本人観光客が再度ペルーに多く来てもらい、ペルーの人々とふれあい、日本の技術を再確認して世界的な遺跡を楽しんでももらいたいと願っている。

話は変わるが、ペルーのもう1つの目玉は食である。8年連続グルメ観光立国世界一に輝いている。私が来た1980年代、本当に食は貧しいものであったが、海、山、ジャングルに豊富な食材があり、1990年代にペルーのシェフがこぞってその食材を使い、新しい料理を開発して、今では「世界のレストラン ベスト50 2019年」に入ったレストランがペルーで2店あり、「ラテンアメリカのレストラン ベスト50」には11店も入っている。近年近隣諸国はじめ欧米からも、このグルメレストランに行くことを目的とした観光客も多く訪れている。

それと同時に我々日本人にとって親近感をもてるのは、これらの

ベストレストランの多くは日本、およびニッケイの食品を多く使い、自分でアレンジした美味しい料理を出していることである。みそ、しょうゆ、みりん、ポン酢などが、多くペルー料理に使われ、良い味を出しているのは嬉しいことである。グルメツアーバスも運行しており、人気を呼んでいる。

このように、良い意味でもまたその逆でも、観光立国ペルーは曲がり角に来ている。今後マチュピチュを軸に食、おもてなし（日本のノウハウ導入）などを取り入れ、世界にトータル面で引けを取らない観光大国になることを願ってやまない。

以上簡単ながら、ペルーに長く住み、観光業に携わる者として意見を述べさせて頂く機会を与えていただき感謝する次第である。

ペルーは気候も良く、特にリマの気温は暑い時でも30度に届かず寒い時でも10度以下にはならない。雨も降らない、資源も豊富である。ゆえに過ごしやすい。そのせいか人々は結構楽天的で、今日あることは明日もあると思っている傾向がある。世界は日々動いている、ゆえに少々辛口のペルー観光の紹介になってしまったが、ペルーを愛するがゆえであるでお許し願いたい。

（つむら みつゆき MICKEY TOUR 社長、
日秘商工会議所理事・観光委員長）



いまや美食ペルーを代表するレストラン「MAIDO」のミツハル津村オーナーシェフ。
「2019年 ラテンアメリカベストレストラン50」で1位受賞